

プラズマ応用でチャレンジした米国での学生生活と 現在の研究活動への影響

What I Have Learned through my Student-life in the United States and How it Affects to My Current Research Life

中部大工¹ ◦小川 大輔¹

Chubu Univ.¹ ◦Daisuke Ogawa¹

E-mail: d_ogawa@isc.chubu.ac.jp

様々な分野において、コミュニケーションツールとしての英語の重要性について疑いを持つ事は稀で、少なくとも最近 100 年はこの傾向は変わっていないという事実は、多くの方々が知るところである。特に、自然科学の分野で研究をすすめる、その成果報告をする上では、英語の使用は必要不可欠である。一方で、近年では、Google 翻訳など自動翻訳のソフトウェアの有用性が年々向上し、その利用が比較的容易になり、語学を自由に操られる優位性について、その地位が危ぶまれたように思われているが、実際はまだまだその完全利用までの道のりは遠い。これは、単純に翻訳の精度によるものだけではなく、他言語の習得とは、上っ面の言葉だけではなく、むしろ生活や習慣に密接に結びついており、言語は生モノであるという、当たり前の事実について、実は多くの方々が認識していない。

また昨今では、日本の多くの学生が若い人々が国際的な経験を持つ事をさけているという報告や、それを表す具体的な数字が散見される[1]。これは、おそらく、若い世代にとって、海外に出ることにリスクだけを感じ、現地に行って学ぶというベネフィットについてあまり身近に例がないということであると考えている。つまり、すでに存在している日本の国際的に閉鎖的な研究環境が、若い世代の国際的挑戦を難しくしているのであり、教員側としては、今後これについてこの傾向について十分にわかった上で、若い学生と接する必要があると考えている。

本発表では、私が実際に経験したアメリカでの大学院生活を紹介し、そこから肌感覚で得られた経験を紹介し、これからの世代の方々に、国際的な経験を有する素晴らしさとその貴重さについて講演を行い、少しでも今後の将来に対する不安を取り除く助けになればと考えている。特に、学生生活で得た様々な経験をいろいろな国の学生と共有したり、互いに切磋琢磨したりすることは、単に外国で学位を取得した事実が残るだけではなく、将来の国際的な人脈を作ったり、そのきっかけになったりする。また、海外で研究活動を行う事により、普段から違う人種と付き合うことが強制されるため、普段から国際的な環境で研究成果を報告することが当たり前になる。その結果、英語の投稿論文についても、自分の言葉で表現することができる。今回の発表では、そのような海外で学位を取得した経験を踏まえて、現在の研究活動への影響について紹介する。

[1] 「若者の海外留学を取り巻く現状について」文部科学省、平成 26 年 4 月